

■■ 特集 共にある

パラダイム コミュニケーション  
PARADIGM COMMUNICATION の提言

— 価値観レベルでのコミュニケーション —

二十世紀の人間関係科終焉と共にあって

まどか 庸代 (南山短期大学助教授)

序

混沌の共生時代 postmodernization の 20 世紀末,

価値観レベルでのコミュニケーションのすすめ

このわたしは

この世にひとつ日本語ことば(思惟)を遺すならば「円 まどか」

この世にひとつ印を遺すならば「○」

クロス または十字 「+」は2000年間以上のこされている

この世にひとつ音を遺すならば「あ[ah]」

ふたつめは「い[ie]」

これで「あ い」がのこる

ひとつならば「わ」

こうしてひとりひとりが遺っているこの世

すべて自己の実感は 祈りや自己の内的重心のバランスからくる

20世紀末 科学の時代はもとより様々な時代描写を経て 共生思想 共生の時代 機械論と生命論とのハーモニーとしての科学技術倫理の時代、人間中心から 地球意識というエコロジカルな全生命体との共生意識の気づきが大切にされている。…イズムという中心主義の納得が薄らぎ、 答えを一つにする認識や教育から 正解のない答え(多様な答え)もありうる現実を人々が意識するようになった。

多価値時代 価値観の多様化 混沌時代を生きるコミュニケーションのあり

方を人間関係原論・人間関係基礎論の視点として考察し、提案をのこす。

批判排他的にというより受容的にかかわるための LIFE SCIENCE と LIFE STYLE を生きる試みを通して 見えていることを 見えるうちに（人間関係科スタッフ最終年に）書き留めておく。

わたしやわたし達が消えても  
それらが温めた思索は  
時代にのこる 時代意識となる  
私の目は そこに向いていた

## I. Paradigm Communication の提唱

パラダイム コミュニケーションという人間関係論をここに提唱して、人間関係科での10年間の哲学的基礎及び原論を通しての実践的思索の結論としておく。

<パラダイム>とはギリシャ語源で「パラディグマ」に由来し「パターン」を意味する。科学哲学 トマス・クーン「科学革命の構造」（中山茂訳）の中で提唱されたことばで、クーンはこれを特定の科学の基礎を成す支配的な理論的枠組み、あるいは一連の仮説と言う意味で用いた（「パラダイムシフト」より）。

日本語の「考え方の枠組み」と対応させ、最近では 「パラダイムシフト」はさまざまな領域や日常生活の中でも広まりつつあることばである。価値観の転換という捉え方もできる。日本の「発想法」（川喜田二郎）「発想転換」を探るということに関連させる用語でもある。

科学 ‘知’ のパラダイムという捉え方で「科学革命」の時代が位置付けられたように、ルネッサンスをもたらした「宗教革命」の時代も歴史の中に位置付けられている。科学の歴史は 科学理論の根底をなす考え方（人々の意識）のパターンが大きく変化した時に起こる。少数派が多数派になる、異端が正統になるということにもつながる。

ひとつのパラダイムから次の時代のパラダイムへの転換シフトがおこる。そのパラダイムシフトは何から何、どのような視点Aからどのような視点Bへの変化転換であり、「価値観の転換」とも表せる。

価値の多様化、ひとつでない正解、（答え）がひとつでない（正解のない答）の許される時代環境に、今日の日本人は置かれている。「共生の時代」が生き方として手探りされている。この中にあって、一人一人を大切に、尚且つ共に居あう関係とはどのようなものなのか。

宇宙・地球との共生、そして多民族の共生、高齢化社会にあっての多世代の

共生、男女の共生、公私の共生、理系文系の共生などなど。人間中心（ヒューマニズム）と人間中心だけでない規範・視野も求められている。滅私奉公 男尊女卑 官尊民卑の時流（大衆や制度の意識）を越えつつ学校制度においては 公立のよさと私立のよさ、マス(多数)と少数のよさを共に生かし合う関わり方をひとつのライフスタイルとして提案しておく。

実際報告者自身がその価値観や発想転換をもって、たとえ少数派でも そのライフスタイルを展開してきたとも言える。人間関係科という「学習共同体」のライフスタイルにみる少数派の価値観は何かという言葉化は、今後の「共生を目指す教育研究制度」模索の中で 答えのひとつを提示しうるものであろう。「教育界のパラダイムシフト」に一役買いうるものであろう。

## Ⅱ. パラダイム コミュニケーションのすすめ

（別稿「わく論」P.113参照）

－「わく論」1998－2000の考察から生まれた人間関係原論－

「人間関係とは何か」という、この哲学的問題設定による人間関係原論を、二年間の人間関係共同体の生活実践を通して各人（学生も教員スタッフも）が、ひとつの「関係論」を実践的に生きて共有し、人間関係のアイデアを創出すること。これが、「人間関係原論Ⅰ・Ⅱ」という科目であろう。科目担当スタッフチーム4名（グループダイナミクス 家族社会学 東方神学 生命知識論）＋26期生全員＋事務局スタッフ数名（事務局全員人間関係科卒業生）、たまたま南山短期大学人間関係科という場で出会った人間同志の織り成す大所帯の学習研究共同体の仕事である。今期の二年間をともに過ごした4名のスタッフチームの特徴はこの学習研究共同体 Learning community というコンセプトを意識し、授業で全員が集まる折にもこのことばは意識的にか無意識的にか学生に伝えていた。

「とも論」に引き続き、関係の焦点を人間の「粹」の問題にあてた。わたしとあなたが ともになる、「わたし（自）とあなた（他）」という本来異なるものが共生していく。「異なる者にかかわる時の、自分の粹組み（価値観）と相手の粹組み（価値観）を構築（明確化）～脱却～再構築化する過程プロセスに気づきつつ、違うもの同志の人間が同じともになる。」このプロセスを意識し合うことこそが 人間関係の「わく論」であり、「かかわり論」でもあろう。

または、「粹の構築化や自己の表明ができず～脱却できず～再構築化できず」に、共生共存がしたくても実現できない、人間の戦争状態・敵対関係・絶交状態・非和解・平和でない人間が現存している。また、誰もが人生の中で大なり小なりの人間関係の問題として 不調和、違和感を体験する。個人のレベルに

おいても、人々・社会・組織・国家というレベルにおいても然りである。

ただし、「～できない」といったが、人間関係論において、あるいは「かわり」において「できる できない」、とか、人間関係を「している していない」とかありうるのかは さらに別の機会に考察を要するところである。

現に、人間関係（論）科や原論の授業時において、

あの人は かかわりを「している人、

あの人は かかわりを「していない人

あの人は かかわりの「できる人

あの人は かかわりの「できない人

ということば表現自体が日常化して、人間関係科という単なるひとつの「学校社会組織」と捉えたまま学生意識の中では「あの人（自分）は、ニンカン生として よい子悪い子 不通の子」という評価をその学生本人が成績評価的枠組みで自問自答して「自らを落ちこぼれている」という負担感や元気の出ない姿をみるに付け 考えさせられた。私自身もかかわりのニンカンでの優劣意識に左右され、スタッフの一員として落ちこぼれ意識に苦しんだことがある。

自分と他者という対自己、対他者、対グループ、対マス（多数）との共生はどのようにありうるのか。わたし自体も生き、他者自体・組織体も生き生き機能し、互いに生き生きワクワクと生を味わえる関係システムづくりはどのように可能なのだろうか。

そこで、これは筆者が、多価値化時代と評されて久しい現代の人間関係のひとつのあり方として、志向していることがみえてきたことがある。それをこのわく論での試行を通して得たコンセプトとして「パラダイムコミュニケーション」と名づけて、提言しておく。

相手と自分が「価値観のレベルで和合すること」古典的には「和して同せず」の知恵の姿なのだろうか、「価値観のレベルで」コミュニケーションが成立し合う関係である。国際化社会といわれるコミュニケーションの中にあって、「日本人は 言語化しないために解りにくい人 正しいけど好かれない人」であり、ことばにしないことの意味をあえてことばで語らなければならないような西欧との国際関係づくりが 現代日本人にもとめられているように実感している。あいまい文化は 以心伝心やお察しの世間では許されても 西欧中心に形成された現代の日本社会や世界では許されなくなった。

和解 和合 平和 など、人々は「和」を大切にしていた。これはかつて日本人の人間関係の特色でもあった。この「和」の思想は おそらく 日本人の「人間関係論」であったかもしれない。「人間関係」という語の形成や使われ方について 別に検討するとして、この「和」が、気持ちよく、とか 気が合うという「気のレベル」や「感覚 feelingのレベル」であれば、「何となくこと

ばにならない、しない」で生活し合える。あまり異ならない異種ではない同種の、単一の気の合う仲間と、そうでない仲間と‘棲み分け’して生息しようという関係が可能である。この場合は「関係していないというのか 関係があるというのか」 「無関係という関係」つくりとも言える。生きるための知恵でもある。

いわゆる「仲良しグループ」「内輪」へのエネルギーが強い関係である。同じ価値観での仲間つくりとも言える。

ニンカンでのトレーニングプログラムにより「気持ち」への気づきや表明、伝達、表現、気持ちへの気づきに伴う自己変容 行動変革は 豊かに着目され育まれているように思う。

わたしの提言する「パラダイムコミュニケーションのすすめ」とは「相手の枠組みや 自分の枠組みを言語化しておく（ことばで把握しておく）、そして、更には 他者（自分）が大切にしているものの考え方、価値観に気づきあうかわり方をしてみてはどうかという提案である。」

その具体的な実習法として考えられることは、すでに 人間関係科の様々なトレーニングで行われているフィードバック法として「私には、あなたが 00000を大切にしようように見える」と記入して相手に伝える 言語化シートに記入内容や表現法を磨いていこうというものである。

『私は あなた（わたし）が こういうわくで守られているように見える  
” 不自由になっているように見える  
” 大切にしているように見える  
私は あなた（わたし）が こういう枠を 築こうとしているように見える  
その枠をひっくり返す（価値の転換・発想転換）とあの人ともっと和するように見える（思える）』

という自分や他者の発想法、枠組みを受容してかかわる。このようなかわり方を通して、生きかた・他者の価値世界への広がりを受容・更には発想転換や他者との新しい価値創造が生まれ、新しい世界づくりが志向される。かわり方やコミュニケーションは互いの生息生存の確保等護身だけでなくクリエイティブな人間性を予感させる。

価値観レベルでのコミュニケーションには、善悪、優劣の評価はなく、「あの人 この人 わたし」をその各人らしく認めようとする行為につながる。相手を否定し、批判する力（そのの焦点化してトレーニングする学習法もある）によって自己や他者の特性や正当性を知るやり方ではなく、自他との価値観という中立的なコンセプトレベルでのコミュニケーションや受容過程による第三の価値観創造で自他の共生を実現しうるかかわり方である。

「わく論」の実習ワーク創作実践を通して、現代社会のひとつの枠組み、

ものの考え方の大きな潮流（かかわりのパラダイム）とその変遷への理解洞察の力、価値の転換への勇氣、多価値化時代の平和共存のあり方までも探索する機会となった。

わく論は 従って、論に終わらず、人間の未来の価値創出を意識化し、生活変化、自己受容・変容、自他ともに変化し合う影響関係が生まれてきた。まさに「かかわり」をもたらすものとなる。

「わく」という面で自身の人間関係を見直すことで、関わりは、古い関係から新しい関係へと変化がもたらされる。その人の持つ枠の規範・中心命題すなわち「価値レベル」でのコミュニケーションや「価値観の交流」で人とかかわること、これを「パラダイムコミュニケーション」と名づけて提案するに至った。

以上、「わく論」を展開することでわたしなりに得た「人間関係原論1998-2000」の成果として 覚書しておく。

[謝辞] ここに 二年間ニンカンと一緒に過ごした26期生全員をはじめ今年度原論スタッフチーム 伊藤雅子先生 山口真人氏 大森正樹氏 事務局菅野均美さんをはじめ 斎藤由紀子さん(16期生) 梅田清美さん(23期生) 三浦真紀さん(20期生)に謝意を表したい。私達がいろいろな体験や気持ちを味わい 時には乗り越えながら さわやかに学習環境を築きあってこられた無事に謝意を表したい。 そんな人間関係原論1998-2000であった。

今は言えるニンカンあつての「神の内在性・人間性への信頼・気づき重視の学習法」「人のやさしさとこわさの実感」「ありがとう」。

ここにいたる ニンカンスタッフとの約15年間の歴史や人間関係や知り合っていくプロセスの妙味、そして 若いエネルギーに支えられつつ 老いるという女性の生き方を心身ともに学んでいることを付記して、ニンカンはひとり一人の行き方を問いつづける存在であることを[人間関係]科スタッフとして言残したい。

### Ⅲ. 生命（科学基礎論）の世界と 人間（関係基礎論）の世界との共生をニンカンで

このわたしは

南山短大人間関係科に縁あって 運ばれてきた

カトリックの大学研究機関

人間の尊厳を掲げて

人間関係という「学」をとった学際的実践的研究教育機関

自然科学 LIFE SCIENCE の柱を カトリック校 文系学生教職員神父と分

かち合う

宗教(者)と科学(者)の対話の時代を生きるという 異文化間コミュニケーションは自身が抱えていた時代意識だった。

赴任にあたり 南短とわたしを結ぶ糸は上記のごとく

そこにどんなスタッフ人があるかなど、赴任前に殆ど意に介さなかった。

人というより そこで志向される筈のコンセプトそのものの見方が頼りだった。

拝啓 新緑のそよ季節となりました。

ひとしづくのいのち、

ライフサイエンスを細々十年散策してまいりました。

今春より、南山短期大学自然科学概論講師として着任いたしました。

皆様からの寛容な御教導の賜がひとひらひとひら思い重なり、

ここに心よりの感謝とお礼を申し上げます。

南山にて、

人間関係科・英語科・人間関係研究センター等日々の中、

異文化間の対話・女性の生涯教育・生命倫理などを学ぶ

この頃でございます。

即健康と益々自由な御活躍を祈りつつ、

今後其私の大きな励みと支えにさせていただければ幸いです。

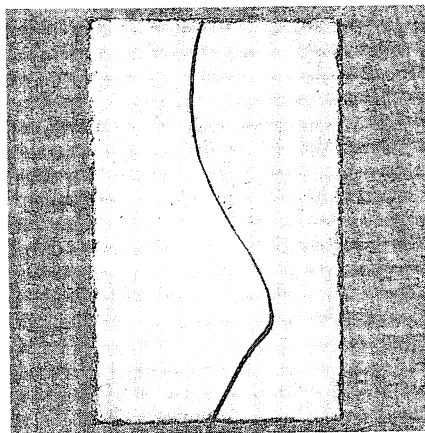
かしこ

昭和61年4月25日

蛭田 まどか 庸代

Magdalena Michiyo

*Loto diog bapto*



アビラの大聖テレジア自筆 神だけで充分 神のみで足る  
(禅語のいう 吾唯足るを知る か)

Batuz作 Paper in works

「ひとしづくの いのち one drop of life」 Madoca1985 :  
異なる次元のものがひとつになるシンボルとして カード作品で表現していた。  
右は 神への(との)ことば・祈り・霊的表出の界  
左は 肉体的力を込めたアート表現(無題 無ことば)の界

life の 研究法を探るスタートとして  
自己を持ち込む学問の可能性(自己化)、境界領域・接点を表現する方法、関係論・境界論・統合総合化、学際領域の実践的確立、学術芸術・知と信・意図と無意図の出会い等を意識した。

一方 ここは 人の気持ちの言語化 プロセスへの気づきが重視されていた。  
グループ ‘個も生き集団全体も生きるライフスタイル’ が実践的・学生教員  
共に模索されていた。まさに、世紀末の共生模索時代のニーズにかなった教育  
研究界の冒険アドベンチャーと時代への挑戦チャレンジの場と人々の環境であっ  
た。

価値観レベルでのコンセプトの表現は個人の内向性閉鎖性と同時に 多世界  
への開放性（共通基盤の言語化：基礎論）である。個人の気持ちレベルの表現  
は個人の外向性開放性と対照的でもある。同時に仲間づくりという（別の視点  
からすると仲間はずれという）閉鎖性である。

人間関係及び人間関係研究センターの学習共同体・研究共同体・学問共同体  
としての現代的意味・特徴は別稿を要す。

21番教室を見たとき、私は ニンカンでは「まどか」という名で仕事に入  
ろうと決心した。

1986年赴任を前に はじめて ニンカンの教育実践空間である21番教  
室を見たとき、ここは「まどか」だ、と思った。 我が家の まどかと称した  
空間や「人々の集いという場による教育」、いまにしてみればいえる「場によ  
る癒し」を想った。

まどか は 我が家が大切にしていた ちちは夫婦の屋号であった。ひと  
が ひととして ただ まどやかに集う ただそれだけで実は「共に育ちあう」、  
そんな教育観 人間観である。先生生徒として 親・子としてだけでなく  
上役下役としてでなく、互いにただひとりの人間として存在しあうことが大  
切にされていれば そんな場の大切にされる人々同志の集いで人は育つ、とい  
う まどか である。そして その「ただまどやかに居合うこと、集うこと」  
の人間存在としての難しさも心得合う寛容さ。ゆかしさ。父母が娘の私に説明  
したというのではなく その姿とその生き方生活とその場から 私がこうして  
ことばにして自身の人生の生き方の柱にしてきただけではあるが、父母の人間  
観や教育観は 子として 自ずと姿を見つつ伝わってきた。

私はそうして 親から大切に育てられてきた。そんな風土を 大学学校で実  
現しようとしている場が南山短大人間関係科なのかも知れない、と、21番教  
室（ここが相変わらず番号で呼ばれているのが殺伐とした公の学校扱いなど未  
だに想う。次年度からはD棟という新校舎も始まる。）に身を置いた瞬間感じ  
たのである。「まどか」は 禅のことばや 西洋東洋の宇宙観でもあることは  
むしろ 名乗りはじめてから いろいろな出会いを通して知っていくことに  
はなった。

わたしの場合は家庭教育や地域の人々の集いあう場としての家としての社会  
教育の環境と、これから始まろうとしていたここニンカンでの学校教育や社会  
教育生涯学習という場づくりとが 自分の中ではつながりやすかった。



まどか として父母からのいのちと自分の人生をもちこんで、人間関係科  
スタッフ意識 で取り組んだこと1986-2000は、生命科学を生み出した現代科  
学のパラダイムシフト過程との関連でチャレンジしたテーマと重ねた。

- : 秩序と無秩序・非秩序・不秩序
- : Newton 物理時間空間枠を外し始めること
- : 近代時間（古典時間枠管理官吏）への抵抗
- : 時間による「信頼」概念の見直し 仕事
- : 「関係」「システム」論の実現例の場づくり
- : 「階層」から平らな「生命場」づくり
- : 「ホロン」「ホリスティック」と人間観
- : 三次元から高次元志向への準備
- : verbal と non-verbal
- : 自己と組織 私の心と公の心のずれ  
ホントとウソ真偽 本音と建前のバランス
- : global home economics 社会家族意識
- : 開放性・閉鎖性 お外とお内
- : 真理の内在性と超越性と体験学習法
- : Human-beings ~ Human-relations

人間にとっての真実 知識 知恵といわれるものの遣し方・表現法を「生命  
科学論の方法論」として探求している。批評批判 他者の否定 YES NO と  
いう二律背反の議論法・書き方・記述法のほかに 「生命」研究法はあるはず  
である。

「自己表現」「自分の内なる声の表出」という自然環境の一部として人間の  
生命／本音表出を授業の場で試み 日本人が日本語を意識した意識形成や生命  
の学問形成を目指している。その意味で「実践的」「試行的」時間空間を要す  
るしごとである。

人間関係科1986-2000という時空間の中で 思索を実践的に展開しうる研究  
学習環境に身を置いていた。そこでの時代背景と 人間背景 意識背景 さま  
ざまな影響関係の中で「生命」論1987-2000が展開されていた。

人間関係科 人間関係研究センターでの生命論プログラム開発・研究開始

1986 LIFE 四つの問い（生産看死）

1993 いろはワーク（japonologie和学研究 日本学の視点）

1996 ホリスティック生命論ワーク（かかわり医学 体験学習法と医療者学習法）

1997 神代文字 と かな（日本文化論日本人の精神史試論）ワーク

まどか庸代 学習研究テーマ	担当科目と人物 (team-teaching)
1970年代 生命科学日本定着期分子生物学	人間関係科発足時期
1980-現在 科学基礎論 神学基礎論 人間関係科論	女性論 1982-1986 伊藤雅子 川喜多好恵 総合科目 生命論開講 1996 伊藤 GLOVER
1986-89 人間関係基礎論 (哲学的)	大森正樹 中野清 会澤俊二 土田友章 酒井ツギ子 市瀬英昭
1989-1993 OD CD LD HD (実践的FW) 体験学習法と生涯学習 実践的組織・社会・指導力・ 人間性開発	人間中心の教育 1986-1991 星野欣生
1986-現在 体験学習による生命倫理 大学での体験学習法開始 Tグループと霊性教育	生命論 1987-1989 グラバア俊子 生命と論理 1989-まどか単 (南山大学)
1989-現在 アートサイエンス、STS 生命科学基礎論 LIFE-ScienceTechnology&Society	自己表現からだのことば 1991-1992 竹内敏晴
1993-現在 「いのちとことば」 life Science & life fantasy 学習共同体から研究共同体への期待 learning community Holistic medical work 体験学習法の発想法と現代生命医療医教育 への取り組み	ボディワーク 1992-1993 グラバア俊子 いのちとことば 1992-まどか単 人間関係原論 1995-1997 1998-2000 山口真人  ホリスティック生命論ワーク 1996-
2000年現在-大学教育における体験学習 大学教育と人間学・ホリスティック教育 ホリスティック医療教育 医学といのち	ボディワーク再 2000 グラバア俊子

#### 展示発表・参画記録とそのコンセプト スタッフとしての創造性開発

- 1989 医学といのち (中川米造 宮下富美夫等) 講演
- 1990 ヒーリングミュージック (宮下富美夫) 公演 (-1999ガイアシンフォニー 音魂)
- 1991 地方の時代 (岩国哲人等) 講演
- 1992 閃き:いのちの存在アート展 (世界観の粒子性から波動性への重心移動 東から西への潮流)
- 1993 Trans Personal 感いの会 (熱田神宮) 黙想瞑想自意識人々の中心存在の出会い七夕 宗教と科学と人間、時と青年意識の奉納 今日明日昔日時風というわたしという存在展
- 1993 コレージュ ドゥ フランス日本学研究所 (Bernard Frank) 留学
- 1995 (家族法要) 供養写経 神代文字供養 桜供養
- 1996 (一周忌法要展) フランスでの和学の発表展
- 1997 LIFE fantaisie (三周忌法要展) 神代文字写経と healing いろは文字幻想展 百済観音法要展献茶式 日本文化会館Paris好日庵柿落
- 1998 風土展 (結び婚)
- 1998 神代文字十回全国巡回展 (1998-2000)
- 2000 もののあわれ (松岡正剛) 講演 観 平家物語 (内海清美等) 国際交流基金 Paris 展

#### 研究会発足

- 1983 生命科学基礎論 科学史科学哲学研究会
- 1989 まどかソサエティ (まどか研究会)
- 1990 LDCDHD (体験学習法のスピリットと leadership-, Community-, Human-Development)
- 1996 ホリスティック医療研究会
- 1997 和学研究会 japonologie

社会化に対して「自己化」を強調する中で「自分論」「自己論」「自己表現論」「自名論・自命論」「自己統合論」が展開されているのである。名づけ、呼ぶことでその存在の意味のことが生まれる。

生命論は自分の名論、自命論で、life science は self science でもある。まどか論を今のところ生命科学生命論自己化論の文脈では「ホリスティック」生命論 和語では「いのちとことば」「まどか（円相 円還）」としている。またその表現の場をカトリック共同体を母体とする南山学園「南山短期大学人間関係科」という、人間性を管理（官吏）教育中心社会の時代に於ても見失うまいとしている学習共同体及び研究組織にあり、そこにつながれた自分の歴史1982-2001そのものが日本人の「生命」の広義の学問の一端につながればありがたい。「人間性 宇宙性 価値体系 宗教性 科学性」という自己統合法を「和」学として今後探るに至っている。

〔結語〕物と心の対話 科学と宗教の対話 という 人間世界のかかわり 異文化観コミュニケーションの実行を心がけつつ 実践的修行の場 創造の場が人間関係科共同体であった。また、そうであってほしいと願いつつ生活してきた。

ニンカンでの15年間のチャレンジを通して、科学知も宗教知もいのちや医療という視点では 人間の健康生活への提言の営みに見えてきた。どちらも対立しあうよりも相互に共生する姿勢が 生命倫理などでは実践的に模索されてきたように見える。しかし、人々の意識層はさまざまであり、多様な選択が可能な段階ではない。制度で護られている人もいればその制度で縛られている人も同時に生活している「いま」なのである。

西洋東洋という 西洋発想の2000年間暦を刻んだ学問の歴史を この「まどか」と自称したたった一人の人間が見渡そうとするならば、宗教の営みも 科学の営みも 世界を支配するほど人間社会を構造化する力をもっていることを畏敬の念を持って認めている。と同時に、たった一人の人間の営みが世界を変遷させていく力ももっていることで歴史が維持されてきたことも認めている。

〔公の価値観と私の価値観とのコミュニケーション〕は 実際にはひとり一人が迫られている人間関係であり、共にあるeco-nomius (economyの語源)、with-ness (J. R. Gibb, 体験学習人間関係トレーニンググループの成長をもたらす「懸念」に関するギブの理論提唱者による) 等のあり方は、さまざまな試行が行われつづけるだろう。

私たち日本人は 西洋の人々の土壌から生み出された キリスト教精神・社会・文化さらには 神学 自然神学・科学 と 科学的精神・科学的物の考え方による社会つくり世界観の時流の中で、学校制度（明治以降の学制）のもと

で、さまざまな異文化コミュニケーションを行ってきたのであろう。

人間社会の知識知恵を司るはずの宗教の時代意識(人々)と科学の時代意識(人々)のあらゆる営みが、結局は 人の一生のいのちの健やかな栄枯盛衰(地球に生まれ 育ち 朽ちる)に少しでも腑に落ちるようにと試行錯誤され続けて今日があるように思える。宗教社会の生み出した行も、科学社会がうみだしている行(営み)も、本来は個の納得や個のかかわりのレベルにおいて主体的に行われている限りは 自己統合されやすく心身ともにバランス感覚のある健康的な生活が可能であるかもしれない。宗教(者)も科学(者)も共同体修行生活。

しかし、それが制度化し 教科書化して いくとき 各個人の価値観による選択の自由が常に保証されていることが人間環境として大切であろう。「公」の怖さが 「大衆」の怖さが、「私」という存在価値には常に付きまとうものなのである。そしてそれと共に「公」は「m a s」(大勢 体制)の存在は「私」の怖さや少数派の怖畏(脅威 驚異)に出会うものである。時には「公」の立場に立ち 時には「私」の立場に立ち ひとりのまたはひとつの共同体はさまざまな見方見られ方の中に身をさらされている。公的publicと私的privateの価値観の共生は この四半世紀の個性化・感性自由志向が衰退する21世紀日本社会や官立行政(事務職能ビジネス)志向の私立学校の今後の課題であろう。

気持ちのレベルだけでなく 価値観のレベルで人とかかわるのは 混沌の共生時代、すなわち情報にさらされすぎた現代の多様な異なるもののかかわりが問われているときに有効かもしれない。同じ価値観同士の中では むしろ気持ちレベルでさまざまな思いが互いの異質性や世界のひろがりを目を向けさせ気付かせてくれるのかもしれない。

共にある ということは 和して同せず 自他の個性の自覚と自律・尊重の歴史が同時にあってこそ成り立つ 一瞬一瞬の出会いのなかで創り出されているもののように思う。

人間関係科2000年度最終年度を迎えるにあたって、この人間関係科という日本で教育研究共同体ゆえに試みてきた自身の研究プロセス1986-1999報告をここに残します。この共同体ゆえにできたこと、また、日本人研究者としてニンカンの歴史と出合った a change agentとして 科学者共同体の科学観学問観教育観生命観日本人社会の価値観への問いかけを実践的に試み挫折や希望に出会えたように思える。そしてそれゆえにここ人間関係科の特性を捉えておきたいし、理解の接点を持とうとしていたできれば幸いです。